

精神障害者/当事者のピア活動経験の意義に関する一考察

- 「なかまへの原点回帰」に焦点付けて -

大阪保健福祉専門学校 金 文美 (007406)

キーワード：精神障害、ピアサポート、コンシューマー・プロバイダー

1. 研究目的

地域精神保健福祉機関における精神障害者/当事者の「ピア」としての実践活動が広がりを見せている。従来、医療・保健・福祉サービスの「受け手」だった当事者が、援助専門職とともに活動の「担い手」となる。それはそれまで障害者として負ってきたネガティブな立場からの価値転換でもある。精神保健福祉領域においては、電話による相談活動などピアカウンセリング、ホームヘルプ活動、従来の精神障害者退院促進支援事業のピア自立支援員の活動、セルフヘルプ・グループ運営、「当事者の語り」活動等々、重層的な展開を見せている。これらピア活動の広がりには、仲間同士の支え合い、つまりピアサポートに意義や価値を見出し、積極的に発展させようとする実践活動と研究が背景にあることが指摘されている（坂本 2008）。援助専門職と協働するピアの役割が拡大する一方、その課題も議論されており、サービスを提供するコンシューマ・プロバイダーに関して、サービス対象者との間におこる二重関係、役割葛藤、秘密保持について言及されている（S. Carlson ら 2001）。

2. 研究の視点および方法

本研究では、精神保健福祉領域のピア活動やコンシューマ・プロバイダーの活動に関する先行研究のレビューを踏まえ、大阪府内の地域精神保健福祉機関を拠点に、ピア活動を展開する当事者に対して面接調査を実施した。当事者が、地域精神保健福祉活動に参与する中で実際にピア活動の経験によって培われたものは何か、それが当事者本人にとってどのような意義を見出すのか、「ピアという生き方」を通してどのような世界を構築するのかが研究の視座である。

面接調査によって得られたデータは、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に質的分析を行っている。

3. 倫理的配慮

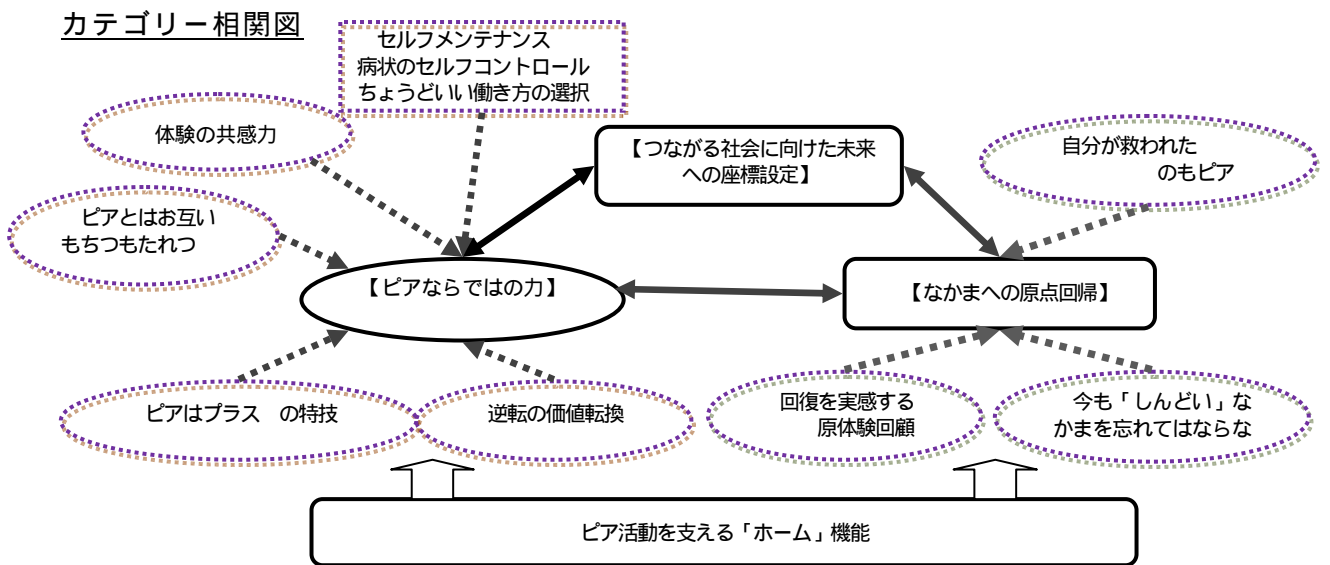
調査協力者に対して、研究目的・調査の主旨に関する文書を提示してインフォームドコンセントを行った。また、面接調査の録音時にも再度調査協力者の匿名性やプライバシーの守秘に関する説明を行い、同意を得た。研究にかかるデータの取り扱いには細心の注意を払い、データ等に関する管理は、鍵のかかる保管庫で行った。

4. 研究結果

以下、分析によって導き出されたカテゴリーを【 】内に示す。

ピア活動の基盤は、【ピア活動を支える「ホーム」機能】によって形づくられている。それは、当事者にとって安らぐ場と温かみのある関係性であり、「ホーム」に支えられたピア活動は【ピアならではの力】を生かした活動を可能にする。当事者にとって「ピアという生き方」は、【なかまへの原点回帰】という今も困難を抱える仲間への思いを通して、【ピアならではの力】を発揮することである。当事者は、ピア活動と出会い、実践する中で、病から解放され、当事者ならではの「体験の価値」を生かした活動を展開すること、そこで「希望」という明確な未来への志向性をもつのである。【つながる社会に向けた未来への座標設定】は、ピア活動経験を通して、「ピアという生き方」で社会にコミットし、未来社会への希望を見いだす当事者の生き方そのものではないだろうか。

ピア活動を支援・推進する援助専門職の役割は、「当事者の社会への関係性の再構築」を共に歩む協働関係 パートナーシップの構築である。この当事者と援助専門職の関係性の構築そのものが、ともに歩む未来の精神保健福祉システムの扉を開く鍵となるのである。



参考文献

坂本智代枝(2008a)「精神障害者のピアサポート活動におけるエンパワメントの条件に関する研究—グループインタビューにおける複合分析を通して」『鴨台社会福祉学論』17,41-52
 Linda S. Carlson(2001)Hiring Consumer-Providers: Barriers and Alternative Solution, Community Mental Health Journal,37 (3)